

一カ



天理教アメリカ伝道庁

No.926

JANUARY

2025



TenrikyoAmericaCanada.org



つらつらせんがく 熟々浅学



— 営業と“にをいがけ” (2) —



新年明けましておめでとうございます。

本年も昨年同様、陽気ぐらし世界実現のために、また、アメリカ伝道庁の上に、それぞれの持ち場立場でにをいがけ、おたすけに励んでいただければと思います。特に今年は教祖 140 年祭年祭活動の最終年となります上から、ラストスパートをかけて、それぞれの直属教会や所属教会の「年祭の活動方針」と「具体的な目標」の完遂を目指してお通りいただければと思います。また、人を誘ってのおちばがえりも目指していただければ有難く存じます。

この原稿を完成させた後の 1 月 7 日午前、伝道庁近郊の海岸沿いで山火事が発生し、その後、数ヶ所で山火事が発生しました。昨年秋大祭時に真柱様が仰せられた「思召にお応えするにはまだまだだということなのだと思った」(立教 187 年 12 月号、5 頁) のお言葉を改めて心に治め直しています。皆さんには、本年一年間、教祖のひながたを目標に、勇んでお通りいただきたく存じます。どうぞ宜しくお願い致します。

さて、前回(2024 年 12 月号)の続きを書きます。

・取引先が本当に求めているもの

(コカ・コーラを日本一売った男の学びの営業日誌、32 頁)

コカ・コーラの商品は他社よりも卸値が高いそうです。そのため、店から文句を言われることが多いとのこと。そこで著者は、多く売れるために CM を流したり多くのプロモーションを行ったりして、より売れるようにお店を支援しているし、原材料も厳選した物を使っていて高めの価格になるという説明をします。しかし、お店側としては仕入れ価格が高く利幅が少ないので納得してくれません。

ある店の自動販売機(以下、自販機)に商品を充填しようとしたところ機械が止まっていた。他社の自販機も止まっていたので、ブレーカーが落ちていると思って、その店の倉庫にある配電盤のブレーカーを元に戻しに行ったのです。ちょうどそこに店主がいたので、ブレーカーが落ちていたので配電盤を見に来た旨を伝えたのです。いつもなら店主から小言を言われるのですが、この時は「自販機の電源がよく落ちて困っている。電気工事が必要か?」と相談を持ち掛けられたのです。よく調べるとその店では、全ての自販機のライトが日中でも点灯している状況でした。この店の自販機は古い機種なので自動で点灯・消灯する機能はなく、夕方になると一台ずつ照明のスイッチを入れ、翌朝に消さなくてはならなかったのです。家族経営のため人手不足で手が回らないため、日中に自販機の点灯の消し忘れが多く、本格的に稼働する夏場の日中は冷却のため電力消費が激しく、ブレーカーが落ちて止まってしまうことがあったのです。

そこで著者は「毎日朝夕の対応は手が回らないですよ」と尋ね、「では私が手伝います。夕方は難しいですが、平日の朝ならなんとかなると思います。電源のスイッチを切るだけですから」と思わず言ってしまったのです。そして翌週から毎日その店を経由してから他の店を回るようになり

ました。

ある日、上司から何故その店を毎朝回るようになったのかと尋ねられ事情を話したところ、数日後にその上司から声が掛かりました。上司は、明るさに自動で反応して電源をオン・オフにしてくれるスイッチをくれたのです。それを自販機に設置すれば毎日前述の店に行く必要がなくなります。

早速、そのスイッチを取り付けに行ったところ店主から「あなたが毎日来なくなると寂しいなあ。(中略)大事ないろいろな条件をくれたりすることよりも、お店の商売と一緒に考えてくれて、それをやってくれることだ。あなたが毎朝来てくれる。そのことが一番なんだ」と商売の本質を言われたのです。

前述通り、この会社の商品の卸値は他社よりも高いため利益はさほどある訳ではありませんが、そんなことで商売の良し悪しが決まるものではないと言うのです。つまり、人と人との繋がりが商売には大切なのだということでしょう。

教祖御在世当時の次の話があります。松田利平氏の娘で10代の頃から数年間、教祖の炊事の手伝いをされ、その後教祖のお世話で乾(いぬい)家に嫁がれた「乾やす」という方が居られました。その方が教祖から直接聞かれた次のお話が立教164年(2001年)1月5日初版第1刷の「御存命の頃」(高野友治著、219頁)に掲載されています。

みかぐらうたに、「一せん二せんでたすけゆく」というお歌がありますでしょう。どういう意味かとお側の者がお訊ねしましたら、

「神様は銭のことやといわれる。また一席二席とも仰せられる」

とのことでありました。この一席二席について私にお話し下さるには、門(筆者註：かど)掃いている人や嫌がる人にくどう話したら我が身にさわるで、嫌なものには話せん方がよい。(中略)一度話したら中一日おいて話に行くのやで、と仰せになりました。それで辻さんや仲田さんは、教祖の命にしたがって、河内へ一席二席と中一日おいてお話しに行かれました。

お道の布教でも同じ人の所に足しげく通うことは大切です。おさづけを取り次ぐ際に三日三夜の願を掛けて毎日通うこともあります。場合によっては隔日におたすけ先に行くような工夫が必要な時があるのかもしれません。肝心なのはどのようにおたすけ先の人と心を繋げていくか、相手の身になっておたすけをすることではないかと思うのです。

・営業のプライドの置き所(前述書、49頁)

誰しもプライドを持っていると思います。時折、そのプライドによって布教が難しくなることがあります。営業でも同様のようなのです。

著者が先輩と商談に行った時のことです。先方から自販機も商品も高く、儲けが出ないの見積書を突き返され、その上「あんたは商売がわかってるのか」とまで言われてしまいました。その時、その先輩は「きちっとした原料を使い、質のいいものを作っているのだから、この卸値になる。まだ何もしていないうちから儲けないといことは分からないだろう」と「売り言葉に買い言葉」の状態になったそうです。そうになると商談は纏まりません。

しかし、別の先輩と商談に行った時のこと。その先輩も最初に店側からは卸値が高いし利益が出ないという話を聞かされます。しかし、自販機を置いた時のメリットを話しながら、店側の主張や意見を受け入れて返答する中、相手の悩みを一緒に解決するパートナーのような存在になっていったのです。そうすると相手の心が動きます。そして見事に商談成立です。

商談成立後この先輩が言います。「自分のことを思ってくれる相手だから、買おうという気になるんだ。俺たちはナンバーワンの製品を扱っているということと、会社の最前線の営業を任っているというプライドを持っていないから、ここだけは拘っている点だから譲れないというような安っぽいプライドを営業現場に持ってくるんじゃない」と。

お道の布教でも同様のことが言えると思います。先ずは相手の身になる。つまり、相手の心に寄り添う。そうすれば、にをいがけ先の人も心を開いて話を聞いてくれるようになるのではないのでしょうか。その時、世界一素晴らしい教えであるとのプライドを持っていることが大切です。そして、何でも受け入れられるだけの度量を持って“にをいがけ”を心掛けるように努めなくてはならないと思うのです。例えば、戸別訪問中、たまに玄関先で怒鳴られることもありますが、そのような時に腹を立てずに居られる度量を持つということです。

変なプライドを持っている私はそのような時に“ムッ”としてしまいます。反省です。

(続く)

深谷 洋

立教187年12月月次祭祭文

これの神床にお鎮まりくださいます親神天理王命の御前に天理教アメリカ伝道庁長深谷洋慎んで申し上げます。

親神様には、本年も変わらぬ御守護をくださり、無難にお連れ通りいただきましたが、本日は早くも納めの御祭りを執り行う日柄となりました。顧みますれば本年は、当伝道庁創立九十周年記念祭を、真柱様のご名代の中山大亮様、真柱奥様の中山はるえ様のご臨席を賜り、滞りなく勤め終えることができました。また、記念祭前日には、アメリカ婦人会、青年会の創立七十周年記念合同総会を、両会長様をお迎えして開催することができ、有難いことでした。私共は、来年の教祖百四十年祭三年千日の年祭活動の三年目に向けて、常にぢばに心を繋ぎ、おぢばがえりの促進と各直属教会で定めた活動方針と具体的な目標の完遂を目指して、日々たすけ一条の御用に努めております。その中にも今日の吉日は、当伝道庁の御祭りを執り行う芽出度い日柄ですので、只今より、ぢばの理を頂戴して、おつとめ奉仕者一同心を一つに合わせ、陽気に座りづとめ、てをどりを勤めて十二月の月次祭を執り行わせていただきます。

御前には、今日の日を楽しみに寄り集いましたよふぼく、信者一同が、日頃賜る御高恩と本年一年間無事にお連れ通りいただきました御守護に感謝し、尚も変わらぬ親心にお縋りたいと伏し拝む状をも御覧くださいますして、親神様にもお勇みくださいますようお願い申し上げます。

今月二十六日より二十九日まで、伝道庁にて学生会冬季練成会を開催し、同時におやさと練成会事前講習を開講予定ですが、何卒、次世代の若者たちの育成の上に変わらぬ親心をお掛けくださり、それぞれの行事を無事に滞りなく終えさせていただけますようお願い申し上げます。

私共は、納めの月次祭に当たり、新年に迎える教祖百四十年祭年祭活動三年目に向けて更に活発に活動を推進し、管内教友が一手一つになって成人の道を歩みたいと存じます。何卒、親神様には、私共の真実の心をお受け取りくださいますして、来る新年は、災害もなく、世界が治まり、一日でも早く、共々に手を取り合ってたすけ合う陽気ぐらしの世の状に立て替わりますよう、また、管内教友一同の心の成人が進みますようお育ての程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

12 月月次祭神殿講話

ターミナル教会長
清水ロバート

皆さん、おはようございます！本日は皆様のおかげで、12月の月次祭を陽気に勇んで勤めさせていただきました。親神様、教祖にもお喜びいただけたと思います。

本日はお話をする機会をいただき、深谷庁長先生に心より感謝申し上げます。

自己紹介をさせていただきます。私の名前は清水ロバート、通称「バビー」です。本島大教会部内の天理教ターミナル教会の四代会長です。

少しの間、私の話に優しく耳を傾けていただけると大変有難く思います。

本日の講話の表題は、「天理教教会本部境内掛での三年間」です。

1993年、3ヶ月の修養科と教会長資格検定講習の前期講習を修了後、同年10月に天理教教会本部境内掛での御用が決まり、三年間勤めさせていただきました。

境内掛は、教会本部での御用の中でも身体的にも精神的にも大変なひのきしんの一つとされています。私が境内掛の一員になりたい、と思って興味を持ち始めたのは、1987年の親里セミナーでの経験からでした。その期間に一週間、境内掛の方々と共にひのきしんをさせていただきました。この経験を通して、これは将来私の天職になるのではないかと感じ、興味を持ったのでした。

実際の境内掛の始まりは、やり方や手順を学ぶ4週間のトレーニングからの始まりでした。運営は、軍隊のような組織形態でした。軍隊と同じように、集団で整列することを教わり、皆で動作を合わせての行進の仕方、曲がり方、止まり方を学びました。大きな声ではっきりと話すことも学び、点呼の時にはそれが特に大切でした。

また、神殿、教組殿、祖霊殿の中と外、そ



して教会本部の周辺エリアにおける境内掛の権限とそれを取り巻く法規制に関して、広範囲にわたる警備訓練を受けました。

私たちは信者さんに目を向け、不審者がいないか注意するよう指導を受けました。また、教会本部の内部での写真撮影は厳しく禁止されていることへの指導も受けました。もし撮影する人があった場合、そのカメラを没収し、フィルムを受け取るようになっていました。

境内での飲食も禁止でした。

私たちの主な目的は甘露台を守ることでした。

境内掛の現場のメンバーは合計204名、管理メンバーは9名でした。境内掛は一組、二組、三組という3つの組に分かれており、各組に合計69人のメンバーがいました。

境内掛には教会本部を囲むように本所（メインオフィス）、中支所（中庭の支所）、西支所（西側の支所）、北支所（北側の支所）の計4つの支所がありました。

本所は、南、東、そして西礼拝場及び地下の警備のほか、回廊やトイレ、教会本部外の周辺地域の巡回を担当していました。

中支所は、北礼拝場と真柱邸入口の警備を

担当していました。

西支所は、祖霊殿の警備及び回廊やトイレの巡回を担当しました。

北支所は、教組殿の裏側及び庭園の警備を担当しました。

私は本所一組・古橋班に配属されました。古橋班長は私たちのチームのリーダーで、古橋班長の立場を説明するのに最も適切な表現は、軍曹ではないかと思えます。彼は23人の境内掛員を担当していました。英語をまったく話せなかった方で、私の日本語力も上っ面だけの非常に限られたものだったため、私は彼のグループ内でのハンディキャップでした。

同じ支所には別に23人のメンバーからなる班が配属されていて、二班で24時間毎に交代して当番を勤めました。ですので、一回の勤務時間は24時間で、その間同じ班の者と支所内で一緒に食事をとり、入浴し、睡眠をとることになります。睡眠は非常に限られたものでした。

普段の本所内での基本的な仕事内容は、礼拝場の中（殿内正面と呼ばれる場所です）の後ろ側の入口に境内掛が一人立ち、さらに互いに向き合う形で礼拝場の正面にあと2人が甘露台を含む神殿と、一般参拝者のための礼拝場を隔てる結界（仕切り棒）の横に立つこととなります。この役目を境内掛用語では、「立哨」（りっしょう）と言います。

礼拝場の外（殿外と呼ばれていました）と地下（階下でした）も礼拝場への入口でしたので、境内掛が立っていました。殿外と階下の境内掛は、丁寧な歓迎の挨拶と日本式のお辞儀で信者さんをお迎えることになっていました。また信者さんたちの靴をきれいな布で拭き、靴を階段の横に揃えます。信者さんたちが帰られる時には、靴べらをお渡しし、もう一度丁寧なお辞儀をして感謝の意を表します。また、別の境内掛一名は、教会本部周りの一時間の巡回を担当します。

ここで私の個人的な経験をいくつかお話ししたいと思います。ある日の涼しい夕方、私は南礼拝場正面の後ろ側の入口の担当となりました。夕づとめが終わった直後の午後7時ごろ、12～15人ほどの家族が一人の人の体を抱えて礼拝場に入ってきました。その時私は、健康状態の悪い人を家族の人が連れてき

て、その回復を祈っているのだと思っていました。その家族は殿外を担当していた境内掛の前を通って礼拝場に入ってきたはずでした。ですので、その時は特に気にしていませんでした。その家族は結界の真前で体調の良くない人を畳の上に横たわらせ、その人を囲んで座っていました。私は、この人たちが家族だと想定しました。その家族は、座りづとめを勤めた後、畳に横たわっている人におさづけを取り次ぎ始めました。そしてこの行程を何度も粘り強く繰り返していました。

休憩時間に境内本所に戻ったとき、私はこのことを古橋班長に報告しました。班長は、よく見張っておくこと、そして南礼拝場に配属されている他の境内掛にこの家族のことを知らせるようにと私に指示しました。日本語で「注意下さい」と私に言いました。

何時間かが経ちましたが、その家族はまだそこにいて、座りづとめとおさづけをこれでもかというほど繰り返していました。私は、班が交代する前の最後のシフトである午後11時30分から午前12時の担当に当たっていました。その時突然、古橋班長が礼拝場に足を踏み入れ、私の隣に立ちました。班長は数分間黙って家族の様子を見ていました。そして私に、家族に近づいてよく見てみるように指示しました。私は前に進み、家族の近くまで行き、その真後ろに立ちました。その時家族の方々も座りづとめをされていたので私の存在には気づきませんでした。畳の上に仰向けになって横たわっている人をよく見ると、顔には白い布がかけられ、体は毛布に包まれていました。それを見てやっとなんか泣きながら、その人が亡くなっていることに気づきました。

私はすぐに古橋班長の元に戻り、あそこに遺体があると報告しました。「班長！出直しての方がいます」という表現を使ったことを覚えています。すると、班長は、教会本部の境内内に遺体を持ち込むことは禁止されており、亡くなった人におさづけを取り次ぐことも禁止されているんだと教えてくれました。

そして、古橋班長は、この違反を報告するために、この人たちのハッピーにある大教会と所属教会を知る必要があると言いました。私は境内掛の勤務中に、大教会名や人の苗字の漢字の読み方を学んでいたのです。この時

の時間は真夜中近くになっていたのですが、この家族はやっと立ち上がって、亡くなった家族の方を出口に向かって運びました。私と古橋班長は、通り過ぎていく家族に頭を下げて、亡くなった方に敬意を表しました。家族がされていることを止めて、境内から出て行ってもらうとしていたところでしたので、自ら出て行くことを決めてくれてとても安心しました。しかし、私たちはこの家族の大教会に連絡を取り、最終的にはこの違反を報告しました。

境内での勤務時間を通して、私はお道の信仰者として成長することができたように思います。長時間にわたる当番の間、信者さん方が親神様に手を合わせるのを礼拝場内で見ることができました。信者さん方が心を込め、真実を尽くして祈っている姿を見ることができました。

毎日参拝にいらっしゃり、常にお気に入りの場所に座る常連さんのこともわかるようになりました。平日もそうですが、特に週末になると、たくさんのお信者さんがおぢばに帰って来られるのを目にすると、喜びで心がいっぱいになりました。週末のおぢばはとても賑わっていました。真夜中にも信者さんたちが参拝にいらっしゃいました。家族連れや友人のグループが、笑顔で笑いながらおぢばを歩き回り、楽しい時間を過ごしているのを見たりもしました。

小銭をいっぱい詰めた大きな袋を持ってきて、賽銭箱に注ぎ入れる信者さんを見たこともあります。賽銭箱は木製なのですが、内側が金属になっていて、小銭が地下に落ちる仕組みになっています。大量の小銭を入れると、ものすごく大きな音で賽銭箱の中を流れ落ちるのが聞こえてきます。

たくさんのお信者さんが、境内掛が用意した白い雑巾を使い、手と膝を床に付けて回廊拭きをする姿を目にしました。床を拭きながら、十二下りを唱和し、南礼拝場から祖霊殿、そして教祖殿、最後にはまた南礼拝場に戻って来ます。そんな方がたくさんいらっしゃいました。お箸やつまようじを使って、木の床の隙間にある汚れやほこりを掃除される方々の姿も目にしました。

私たちは月に一度、奈良駅に出向いて路傍



講演をする日がありました。私はもちろん英語でスピーチをしました。

そこから小さなグループに分かれて戸別訪問の布教活動を行います。訪問先では、私たちが家に上げて下さり、お茶を勧めてくれる上に、私たちがするのをいがけの話を聞いて下さる方もいらっしゃり、興味深い経験をさせていただきました。

現金をいただいたこともありますが、当然ながら教会本部に戻った後、賽銭箱へお供えし、この経験への感謝を込めて、お礼づとめをさせていただきました。

大祭時には、一組、二組、三組の3つの組すべてに、おつとめ中に担当する場所が割り当てられます。私の班は24時間の当番を終えたばかりのところ、すぐに他の組のサポートをしなければなりません。ですので、その日は帰ることができませんでした。皆、担当場所を割り当てられており、ある年の一月の大祭の際、私は西礼拝場の南側の結界の横で立っていました。私がここに配置されたのは、結界を越えて神殿に入ったり、甘露台に触ろうとする人を止めるためでした。

礼拝場にはたくさんのお信者さんがいました。私の立つ場所の真横に人が座っているような状況でした。空いたスペースが全くなく、これは身動きが取れないな、と思ったのを覚え

ています。この状況だと、甘露台に近付こうとする人を止めるには、結界を飛び越えて全力で走らないといけません。礼拝場には信者さんがいっぱいだったので、その間を通り抜けて不審者を止めるというのはほぼ不可能な状況でした。

その朝、私は5時間ぶっ続けで担当の場所に立っていました。甘露台を守ることに一点のみに集中していました。凍てつくおぢばの冬の気温の中で、境内掛はジャケットも手袋も帽子も着用できません。私は厚手の下着を上下2枚ずつ重ねて着用し、その上に長袖のシャツにネクタイ、そしてカーディガンを着ていました。教会本部のハッピーは厚手の生地できていました。後ろポケットには、上から白いカバーを被せてある分厚いニット地の「ばあちゃん」スタイルの靴下を入れていました。冷え切った畳の上に立つ時や回廊の巡回の際にそれを履くことで足を温かく保つことができました。深夜の時間帯に、外の廊下に積もる雪を掃き出す時にもこの靴下が役立ちました。こうして話していると、午前3時頃が、本格的に氷点下の気温が身に染みてくる時間だったことを思い出します。

氷点下の気温、蒸し暑い夏の暑さ、限られた睡眠時間という過酷な状況の中ではありましたが、親神様のための御用をさせていただいているんだということを忘れないように努め、常に前向きな姿勢を保つようにしました。

一度、このような事件がありました。昼間の南礼拝場で30代の男性が私の前を走り抜け、結界を飛び越えたのです。すぐさま追いかけて捕まえ、事なきを終わりました。その方は修養科生で、精神疾患を患っているということがわかりました。その後、彼のグループへ戻っていただきました。

またある時には、このようなことがありました。これは週末だったのですが、私が南礼拝場で立っているとき、私が人を見張っていることをわかっている小さな男の子がいました。その日私は入口に立っていました。男の子は結界に向けて駆け出すことで私がどうするかを試しました。私が全力でその子に向かって走ると、その子はすぐさま走るのを止めるのです。母親は子供を捕まえて座らせ、参拝を続けました。私は礼拝場の真ん中に陣取り、

その子を見張っていました。

その後男の子は再び立ち上がり、またしても走り出しました。今度は結界のところまで行き着いたので、その瞬間、私は結界を飛び越えて神殿側に入りました。少年は真正面から結界に突っ込み、そこで額を打ちつけ、その反動で押し倒されて仰向けになって転倒しました。大泣きしているその子を、母親は腕を挿んでその場から引き下げました。そして子供の頭をたたき、私の方を見て頭を下げ、心から謝ったのでした。

この事件の際、南礼拝場にいた他の境内掛2人も、駆けつけていました。

子供のいたずらとはいえ、もしこの男の子が結界の向こうの神殿に足を踏み入れていたら、南礼拝場の担当であった我々境内掛3人は全員、非常に厳しく叱責されたいと思います。

境内掛では、結界を越えた人があると、「結界侵入」という言葉を使います。その人が神殿内に危害や損害を与える意図があるとみなされれば、重大な問題として取り扱われ、それ相応の厳罰が下されます。

その後、主任に昇進した時、「回廊整理」という役割を6カ月間勤めました。これは、朝夕のおつとめ時に真柱様の警護を担当する役割です。

おつとめ終了後、真柱様と教会本部の本部員先生方が南礼拝場を出て、教祖殿に向かいます。私の他、数人の境内掛が回廊で待っていて、私の役目は真柱様の前を歩いて教祖殿へお連れした後、祖霊殿へお連れするというものでした。回廊に座っておつとめに参拝されていた信者さん方を端に寄せて、真柱様ご一行のために道を開ける役割を担当する境内掛もいました。

真柱様と本部員先生方を初めて回廊でご案内した時のことは今でも覚えています。月次祭の日の朝づとめの時でした。回廊には、正座と呼ばれる日本の伝統的かつフォーマルな座り方で床に座っている人がたくさんいました。

信者さん方が私の方を見ます。これは真柱様が近くにいらっしゃるということを意味していました。そして真柱様への敬意を表するため、皆はその場で頭を下げます。一方私は、

背筋を伸ばし、胸を張って両腕は体の横へ、指先は下に向けて立っていました。頭を上げ、顔は正面に向けていなければなりません。参拝者の中に知り合いがいても微笑みかけたり挨拶をしたりしてはいけません。友達が手を振ってくれたことが何度かありましたが、気付かないふりをしなければなりません。

正直に申しますと、武者震いがしていました。緊張していましたし、怖かったのです。真柱様が背後にいらっしゃる中で、ゆっくりとしたペースで自分一人で歩かなければなりません。このお役は、境内掛の中でも最も榮譽ある役割の一つでした。選ばれたことをとても光栄に思い、誇らしく思うとともに感謝の気持ちもありました。私はこのお役に当たった時、尊厳と敬意を持って自分の役割を勤めさせていただきました。

本所の事務所のフロントデスクの担当となった時は、天理プールまで車で行ってその北側にある塔の上まで上らなければなりません。そこには日本の伝統的な大きな太鼓が置いてあります。塔に上ると、スチールのシャッターを全て開きます。塔の上からはおちばと、天理市が見渡せます。そこから、無線で本所の事務所に連絡し、準備が整ったことを伝えます。そして4フィートほどある大きな木のバチを手に持ち、本所事務所に据えられた赤ランプに視線を集中させます。ランプが点灯すると、朝づとめまたは夕づとめの30分前だという合図です。それを見ると太鼓を力いっぱい叩き、おつとめ開始時間までのカウントダウンの意味を込めて、5分間太鼓を打ち続けます。

天理市内に響き渡った太鼓の音は、信者さん方に、おつとめのためにご本部へ向かう時間だということを知らせる意味がありました。太鼓を叩くのは本当に楽しかったです。とても刺激的な気分になりました。

いくつかのユーモア溢れる話をしたいと思えます。

年に一度、教会本部の御用を勤める全部署が、真柱様から直接「慰労」を頂戴します。当時の真柱様は中山善衛様でした。天理教の三代真柱様です。

朝づとめ後、教祖殿の後ろ側にある、畳敷

きの広くて美しい会議室で慰労を戴きます。正座をして並び、順番を待ちます。

多数の教会本部の先生方とのお付きの方々を控え、真柱様が前にお座りになります。室内はとても静かで落ち着いた雰囲気でした。部屋の中だけでなく外にもたくさんの方がいます。

手筈としては、真柱様が一人一人の名前をお呼びになります。呼ばれると前に進み、真柱様の真正面に正座して座ります。そして、畳を見つめながら頭を下げ、両手をすくい上げて前に差し出します。真柱様はすくい上げた手の中に封筒を置いて下さいます。それを受けた後は、敬意を込めて軽くお辞儀をし、会議室から出ていきます。

さて、真柱様が私の名前を呼ばれたとき、「境内掛の清水ビーバ」とおっしゃいました。私の名前が「ビーバー」であるかのように聞こえました。

背後ではクスクスとたくさんの笑い声が聞こえました。外での笑い声もはっきりと聞こえました。念のため申し上げておきますが、外にはスピーカーがありましたので、中の声がすべて丸聞こえだったのです。個人的に面識のあった先生方やお付きの方もその場に何人かいらっしゃり、その方々も笑っていました。真柱様は顔を上げ、周りを見渡されながら、何が起きているのか全くお気づきではありませんでした。

そこで、お付きの方が真柱様の耳元で私の名前を告げました。すると真柱様は微笑みながら私をご覧になり、私の名前を「境内掛の清水バビー」と呼び直されました。それを受けて私は頭を下げ、手を差し出し、「慰労」を頂戴しました。

真柱様は笑顔でお謝りになり、頭を下げられました。

私は満面の笑みを浮かべながら頭を下げました。外に出ると、たくさんの方が私のことを「ビーバ！」と呼んで笑いました。これは教会本部勤務者の間でしばらくの間流行ったジョークでした。面白いことに、それから何カ月も経った平日の少し遅めの午後の時間に、中山善司様（当時四代真柱様となられる予定の後継者のお立場でした）が、境内掛の立ち会いのもと、おちばの外の境内を歩いておら

れた時があり、その時善司様は境内本所の事務所にて近付いて来られました。私は事務所の外で、天理教語学院で働いているハワイ出身のアメリカ人の知人と話をしているところでした。私をご覧になった中山善司様は、突然こちらに歩いて来られ、私と会話し始められました。善司様は、最初に私に「バビーさん」と呼びかけられました。私は当然、恭しくお辞儀をして挨拶させていただきました。そこから中山善司様は私の日頃の奉仕に感謝の言葉を述べられ、その場を去られました。

どうして善司様が私の名前をご存知なのかを不思議に思っていました。本所の事務所に戻った時、皆から褒められました。その間も、なぜ中山善司様が私の存在を知っていたのかを、ずっと考え続けていました。

境内掛の一員として過ごした日々は、たくさんさんの挑戦をさせてもらった、人生で最も思い出に残る、決して忘れられないものとなりました。境内掛をさせていただくことで、心からの感動とたくさんさんの刺激を受け、それを通してお道の教えの本当の意味を学ぶことができましたと思っています。この経験を通らせて下さり、お導き下さった親神様に感謝しています。また、日々の暮らしの現実と向き合いながらも陽気な心を持ち続ける方法もお見せいただきました。

勤務以外の時間は本島詰所に住んでいました。ここで、現在私の妻である美しい真実（まさみ）を初めて目にしました。まさみは当時、3か月の育成コース（修養科）の生徒でした。彼女は会長宅の台所（大教会長様の家の台所）でのひのきしんを担当していました。私はそこで天理教語学院のアメリカ人の学生の何人

かと話していましたが、その時台所の後ろでゴミ出しをしているまさみを見て、なんて美しい人なんだろう、と注意を引かれました。

私はすぐに彼女に惹かれ、同じく本島で修養科生だった女友達に相談してまさみの情報を聞き出しました。

その時私の友達とまさみは「三期生」と呼ばれる3ヶ月の修養科の最後の月の生徒で、近いうちに修養科を修了する予定でした。

驚いたことに、友人は私がまさみに興味を持っていることを本人に伝え、私とまさみを引き合わせてくれました。

その後、1996年10月20日に本島大教会で結婚式を挙げ、1998年1月にアメリカへ帰るまでの2年間、私たちは天理市にある本島詰所で住み込み、詰所勤務をさせていただきました。

最後にお伝えしたいこととして、おぢぼそして大教会で過ごした経験を通して自分を見つめ直す努力をし、また、当時得た知識を使って、この素晴らしい教えに貢献するための真実の種を蒔けるように努力を続けて参りたいと思います。

教祖140年祭を祝うため、おぢぼに帰れるようそれぞれに予定を立てて参りましょう。

ご清聴ありがとうございました。



雅楽おとまり会 1月3日～4日





伝道庁連絡



12 月 月次祭

祭主 庁長
 扈者 岡崎マーロン 雪本 善
 賛者 武本エディ 田所レイ
 指図方 長谷川邦昭
 神殿講話 清水口バート (英)

教会事情

ブラザーフッド教会：任命願、臨時祭典願
 おはこび：2024 年 11 月 26 日
 教会長：ブラウン・レイモンド・ジェームズ
 奉告祭：2025 年 2 月 8 日
 サンフランシスコ教会：移転願、臨時祭典願
 おはこび予定：2025 年 1 月 26 日
 鎮座祭：2025 年 1 月 31 日
 奉告祭：2025 年 2 月 1 日
 タミナル教会：神殿屋根葺替願、遷座祭日願 (2 件)、
 臨時祭典願
 おはこび予定：2025 年 3 月末
 鎮座祭：2025 年 5 月 30 日
 奉告祭：2025 年 5 月 31 日

お出直し

ジョージ・ブレッシュ、クーパティーノ布教所長が昨年 11 月 10 日午後 11 時に出直されました、享年 98 歳。11 月 30 日(土)に葬儀が執り行われました。ご生前のご功績に厚く御礼申し上げます。「一れつ」への掲載が遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

おやさと練成会事前講習

おやさと練成会事前講習は、昨年 12 月 26 日(木)～29 日(日)の日程でアメリカ伝道庁にて開催され、8 名が修了しました。今回は TSA の行事に参加できる時間を設け、学生達の中でより強い絆が生まれたのではないかと思います。おざばで開催されるおやさと練成会への申込締切は 1 月 31 日(金)です。

TSA 冬季練成会

TSA 冬季練成会は昨年 12 月 26 日(木)から 29 日(日)までアメリカ伝道庁にて開催され、16 名が参加しました。

Three Day Course

2 月 21 (金)～23 日(日)の日程で開催しま

す。英語コースは 4 名以上の申し込み、スペイン語コースは 2 名以上の申し込みがある場合のみ開催します。締切は 2025 年 2 月 16 日ですが、受講希望者が分かっていたら早々に伝道庁までご連絡下さい。

修養科英語クラス

修養科英語クラスが 3 月末から 3 ヶ月間、おざばにて開講予定です。日本国査証の必要な志願者は、査証取得に時間がかかりますので、お早めに伝道庁にお知らせ下さい。尚、何らかの理由で修養科英語クラス開講の中止、また査証取得ができない場合がありますので、ご了承下さい。

全教一斉ひのきしんデー

全教一斉ひのきしんデーの計画を各地区にてお願いいたします。各地区担当者の方への計画書用紙を配布しますので、伝道庁に提出して下さい。

第 85 回アメリカ修養会

第 85 回アメリカ修養会が、6 月 15 日(日)から 7 月 12 日(土)まで開講予定です。開講約 1 ヶ月前(5 月 18 日)までに、英語・日本語クラスは 2 名以上、スペイン語クラスは 5 名以上の申し込みがある場合に限り開講予定です。

南カリフォルニア山火事募金・ひのきしん活動

南カリフォルニアでの山火事災害に対して、3 月 16 日(日)まで、伝道庁事務所に募金箱を設けて募金を始めます。小切手の場合は宛名に「Tenrikyo Mission Headquarters in America」と記入し、メモ欄に「SoCal Wildfires Disaster Relief」または「南カリフォルニア山火事募金」と書いてください。尚、現金の郵送はご遠慮ください。

Tax 控除を希望される場合は、封筒に現金又はチェックを入れて封をし、寄付者氏名、住所、金額と「SoCal Wildfires Disaster Relief」または「南カリフォルニア山火事募金」と封筒に書き、募金箱に入れてください。後日、アメリカ伝道庁より感謝状を送らせていただきます。

ひのきしん活動を 1/25 (土)と 2/1 (土)にパサデナ市内で実施予定です。作業内容は物品の仕分けなどの予定ですが、詳細は後日メールなどで連絡致します。



1/11 (土) 山火事お願いづとめ

各会連絡

布教委員会

- ・教会長・布教所長・出張所長夫妻研修会を以下の通り開催致します。

日時：2月15日午後2時受付、2時30分開始

対象：教会長・布教所長・出張所長夫妻、
相談役夫妻、各委員会及び各会の委員
(Zoomでの参加可)

場所：伝道庁多目的ホール2階会議室

内容：メンタルヘルスについての理解を深め、
おたすけ活動に役立てる

申込みは以下のリンクより、フォームに必要事項を記入下さい。(締切：2/9)

<https://bit.ly/4gtwJJ4>



- ・おぢば回廊拭きひのきしん
御本部春季大祭で帰参の方は、1月25日、朝づとめ45分前(午前6時15分)に南礼拝場東側後方にご集合ください。

教化育成委員会

- ・TSA 新委員紹介
委員長：萱間陽介
副委員長：弓削ジェネヴィーブ
副委員長：たばたルーク
副委員長：グレイガス・花
書記：雪本ロレーン
会計：メンドーザ・マディソン

広報委員会

- ・教祖140年祭に向けた活動のアイデアを管内の方々が共有できるようにとの思いで、実際に活動している方々の情報を「一れつ・ニュースレター」に連載しています。つきましては、各教会・布教所・地区、また身の周りの方々の活動情報・写真等の提供をお願い致します。

情報提供先：川上 (kamishuyo@hotmail.com)

林 (takhayashi@gmail.com)

- ・伝道庁ホームページがアップデートされ、祭典講話、「SoulFire」の記録ビデオ等もアップデートされました。是非、伝道庁ホームページをご覧いただき、また周りの方々に紹介いただきますようお願い致します。また、domain name も Tenrikyo.com から TenrikyoAmericaCanada.org に変更されました。

Future Path 委員会

- ・8月30、31日に天理教原典の勉強会を開催予定。

婦人会

- ・天理教婦人会総会
2025年4月19日(土)
午前9時30分 於 本部中庭
- ・別席強調月間 3月1日～4月30日
- ・アメリカ婦人会総会
5月17日(土)午前10時 於 伝道庁
- ・地区責任者の集い (Zoom)
1月18日(土)午後2時

少年会

- ・少年会総会は8月16日(土)に開催予定です。総会の案内、及びアンケートを2月に配布します。
- ・少年会キャンプを6月20日(金)から22日(日)の日程で行います。詳細は追って発表致します。
- ・新生児や転入された少年会員がおられましたら、【moto1884@gmail.com】までお知らせ下さい。
- ・鼓笛隊員募集中！道の仲間の輪を広げ、伝道庁、各拠点を賑やかにしましょう！たすけあいや、人のために尽くす喜びを学べる活動を行ってまいります。詳しくは上記のメールアドレスまで。
- ・少年会員に教祖のお話をしましょう。親子ぐるみで教会に参拝し、ひのきしんをさせていただきます。

NY センター

- ・2/22 少年会お泊まり会(～23日)

管内新任教会長さんご紹介 2022年～2024年

2022年から2024年にかけて、9名の方々が新たに管内の教会長として任命されました。記載はおはこび日と今後の抱負です。今月は4名の方々をご紹介します。



Los Angeles Central 教会
野町 Jonathan

2022年4月18日

「最高のようぼくになることです。」



San Mateo 教会
山本 晃

2022年4月18日

「コロナの最中教会長の任命のお許しを頂き、勿体無いご守護の中、親々のお陰で結構な毎日を通らせて頂いております。まだまだ未熟者ですが、ご本部の御理を十分頂くべく、おちば帰りを中心にこれからもお道の上で頑張らせて頂く所存でございます。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。」



Central Fresno 教会
雪本 Steven

2022年10月26日

「私の抱負は、親神様が私たちのために創られ、残念ながら人間が破壊している地球を救う手助けをすることです。そして、他の人々に導きをもたらすことです。」



South California 教会
宮野正雄

2023年2月26日

「私の父と母が何年も前に始めた南カリフォルニア教会を続けていきたい。」

教会	会長	おはこび	奉告祭
2022年			
LA Central 教会	野町 Jonathan	4月18日	6月11日
San Mateo 教会	山本 晃	4月18日	6月11日
Central Fresno 教会	雪本 Steven	10月26日	12月3日
2023年			
South California 教会	宮野正雄	2月26日	4月30日

TSA 冬期練成会 & おやさと練成会事前講習





お餅つき



TENRIKYO MISSION HEADQUARTERS IN AMERICA
2727 EAST FIRST STREET
LOS ANGELES, CA 90033

NON-PROFIT ORG.

U.S.POSTAGE
PAID

LOS ANGELES, CA
PERMIT NO.30002

CHANGE SERVICE REQUESTED

THE JOYOUS LIFE



TENRIKYO came into existence on October 26, 1838, when God the Parent, Tenri-O-no-Mikoto, became revealed through Oyasama, Miki Nakayama, to save all humankind. God the Parent is the original and true Parent who not only created humankind but has nurtured and protected human beings ever since.

God the Parent created humankind so that by seeing us live the Joyous Life, God could share in our joy. The living of the Joyous Life is, therefore, the purpose of our existence. Since God the Parent is our Parent, we are all God's children, and thus we could realize that we are all brothers and sisters.

“With human beings:the body is a thing lent by God, a thing borrowed.
The mind alone is yours.”
Osashizu:June 1, 1889

We are taught that our bodies are borrowed from God the Parent and only our minds belong to us and, by the proper use of our minds, we will be able to live the Joyous Life.